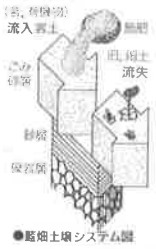
【１１】　人々の衣服を染めた阿波の藍

１　生徒用資料解説

（１）「四国三郎」吉野川と藍づくり



●藍畑土壌システム図

江戸時代に吉野川水系に堤防はなく，徳島藩は藍作を保護するために，本格的な河川改修工事を控えてきたのではとの説もある。しかし，当時の最も有利な作物は米であり，藩も農民も米作によって安定した収入や生活を夢に描いていたが，改修には莫大な資金と人手が必要で一大名の力で成し遂げられるものではなかった。そのため吉野川流域では「藍しかない」という土俵際での選択であった。

吉野川流域では，毎年のように台風後に洪水が発生し，洪水により地力の衰えた表土が藍畑から流失し，入れ替わりに上流から肥沃な客土が流入する。さらに大量の魚肥を投入することで，流域は強大な藍葉産地を形成していった。

また藍は，連作を嫌い，隔年でしか収穫できないが，吉野川流域では上述のような洪水の肥沃な客土により，毎年収穫が可能であったことも藍作が盛んになった理由の一つである。

（２）藍屋敷「田中家住宅」

田中家は，寛永年間(1624～44)，徳島藩の招きによって播磨から藍作の指導者としてこの地に移り住み，開発と藍作を家業としてきたが，毎年のように吉野川の氾濫で被害を受けるため，1854(安政元)年ごろからこの敷地の造成をはじめ，1887(明治20)年ごろまでにすべての建物を完成させた。敷地は川の氾濫に備えて石垣を高く積んで造られている。敷地の中央やや後ろよりに寄棟入母屋造の主屋[1865(元治2)年]が建つ。表門[1870(明治 3)年]との間に広場(作業場)をとり，この広場を中心に石垣に沿って藍納屋[1887(明治20)年]，南藍寝床[1860(万延元)年]，北藍寝床[1873(明治6)年]，土蔵[1870(明治3)年]など，藍の製造に使用される建物が建てられている。主屋の東側には表庭があり，これに面して座敷[1885(明治18)年]，その裏に宝庫[1859(安政6)年]があり，建物で敷地を取り囲む城郭のような景観を造っている。このような屋敷構えは大規模な藍商農家の特徴であり，当家は，江戸時代末から明治にかけての「藍屋敷」の姿をそのままに残す貴重な民家である。

□主な建物の役割

主屋，座敷：藍商農家の住まい。　表門：藍屋敷の入り口。　藍納屋：できあがった阿波藍を一時保管しておく納屋。　藍寝床：藍を発酵させる作業を行う建物。　土蔵：財産を保管するための建物。

（３）新町川沿いの藍倉

明治期の徳島市の様子

徳島藩では藍の需要が急増したことを背景に生産地と徳島城下の水上輸送の向上を図るため，5代藩主綱矩(つなのり)の下，吉野川本流(現旧吉野川)を分水して，別宮(べっく)川(現本流)に流す計画をした。当時の別宮川や城下の支流は，渇水期になると船の通行もままならなかったが，1672(寛文12)年に本

流からの通水路が完成し別宮川が本流となっている。

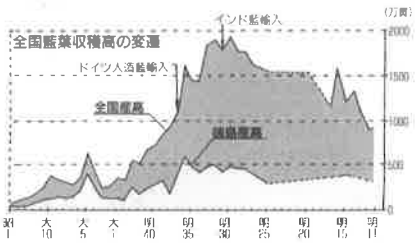
水量が豊かになった徳島城下の河川には，大型の船も通行できるようになり，とくに新町川の西船場町と対岸の新町船場町には，江戸と大坂をはじめ諸国の藍市場に藍玉を販売する藍商たちが郷村部から進出し，店舗や出荷前の藍を保管する倉庫が建ち並んだ。こうして吉野川流域で産出された藍玉を集積し，藩外の市場からの注文に応じて出荷できる体制を備えていった。また藍の栽培には大量の金肥(きんぴ)(魚肥)を必要としたためその集積にも倉庫が必要であった。

藍場浜親水公園の藍倉群のオブジェ

このように新町川沿いには藍倉が立ち並び，徳島城下に景観上・経済上大きな変化をもたらした。

（4） 藍作の衰退のあともなお

藍産業の衰退は，大量生産に伴う品質低下が直接的な原因ではあったが，ドイツからの人造藍(化学染料)の輸入が，決定的な打撃となった。明治30年代の人造藍の輸入拡大は，徳島をはじめ国内各地の藍作・藍業を急速に衰退させていった。このことによって，藍は商品作物としての歴史的役割を終えていった。



藍の衰退のなかで，吉野川中下流域の藍作地帯では，稲作への転換をめざし，麻名用水や板名用水，北麓用水，柿島用水，阿波用水などの大規模な用水工事が開始された。また，藍作の後作としてダイコンやニンジン，ゴボウ，カボチャ，スイカなどの栽培が始まり，とくに板野郡の畑地ではダイコンが大量に栽培された。これは「阿波たくあん」として加工された。また，藍の間作として栽培された大豆を利用した味噌造りも盛んになった。その後大正から昭和期にかけて，養蚕業の発展に牽引されて桑作が拡大し，この地域の農業構造は大きく転換した。戦後も吉野川中下流域では園芸作物の栽培が盛んで，京阪神への農産物の供給地として重要な役割を果たしている。

徳島県指定有形文化財『奥村家住宅』

吉野川下流域は阿波藍の生産で栄えた地域で，今も諸処に「藍屋敷」と呼ばれる豪壮な民家が残る。奥村家もその代表的な例である。主屋は，広い敷地北寄り中央に南面して建ち，これを囲むように県下でも遺構の少ない奉公人部屋，南と東西に三棟の寝床，贅を尽くした西座敷，北・中・南の各土蔵，大門，東門，湯殿，便所など13棟がたつ。建物は文化年間(1804～18)から明治20(1887)年ごろにかけて建てられた。

国選定重要伝統的建造物群保存地区『美馬市脇町南町』

脇町は吉野川北岸沿いに鳴門に至る撫養街道と，高松へ通じる街道が交叉する交通の要衝であり，江戸時代に阿波特産の藍の吉野川中流域での集散地として，早くから舟運を利用できる南町に富商が軒を並べた。保存地区の範囲は，東西約400mの南町の両側，戸数88の町並みである。地区には18世紀はじめから大正・昭和ごろのものまで，それぞれの時代の特徴を示す民家が揃っており，主屋の７割が伝統的建造物として保存され，現在は「うだつの町並み」として知られている。

選定保存技術『阿波藍製造』

阿波藍の品種は蓼(たで)藍と呼ばれるタデ科植物で，葉の中に青色の染料となる色素を含む。近年の藍栽培農家は70余軒，栽培面積は約23町歩である。春まだ浅いころ種を蒔き，間引き，定植，防虫，除草，施肥，灌水と７月の炎天下の刈り取りまで続く。梅雨が明け晴天の日に刈り取って乾燥させ細かく刻み葉と茎を分ける。蓼藍の製造法は「発酵法」である。細かく刻み乾燥させた葉藍を「寝床」という特殊な土間に堆積し，水を与えて藍こなしを繰り返し発酵させる。約３ヶ月後には「すくも」という染料ができあがる。現在，徳島では約797俵（平成26年度実績）製造され全国に送られている。繊維産業，染料化学の発展とともに藍産業は世界的に衰退したが，阿波藍は途絶えることなく作り続けられた。国は阿波藍の優れた製造技術を保存するため，阿波藍製造を国選定保存技術に選定した。

《参考文献》図解『徳島県の歴史』河出書房新社，『阿波藍民俗史』上田利夫著，『吉野川の歴史』三好昭一郎，『徳島の文化財』徳島新聞社･徳島県教育委員会，『徳島県の近代化遺産』2006年徳島県教育委員会，『徳島県の近代和風建築』2013年徳島県教育委員会，『重要文化財田中家住宅保存修理報告書』1981年重要文化財田中家住宅修理委員会

２　ねらい

◎かつて阿波を代表する特産物であった阿波藍とそれを生産・出荷した藍屋敷・藍倉について学ぶことを通して，郷土の歴史について関心を高め，理解と愛着を深める。

◎藍を作るために洪水とたたかった先人の知恵と努力を通して，藍関連施設の文化財的価値を理解し，これを大切に守っていこうとする心情と態度を育てる。

３　教材選定の理由

ほとんどの徳島県人が，かつて阿波の代表的な特産物が阿波藍であったことを知っているが，藍作が盛んになった理由や先人が吉野川の洪水と闘いながら住居等を工夫して藍作を行ってきた知恵やたくましさを知るものは少ない。

藍屋敷には，吉野川の洪水に遭いながら，そこに藍作に適した土壌を見いだすなど，デメリットをメリットに転じた先人の努力や工夫があった。かつて全国に名をはせた「阿波藍」とそれを支えた「藍屋敷」に見られる藍商農家の工夫を通し，先人の知恵やたくましさを学ぶことで，郷土を愛し誇りに思う態度と心情を育てることに資すると考え，本教材を選定した。

4　学習の流れ

	学習活動	指導上の留意点
導入	1　阿波藍について知っていることを発表する。	1　教材の資料や阿波藍の実物などを提示し自由な発想を促し，学習意欲を喚起する。
展開	2　徳島で藍作が盛んであった背景を理解する。	2　江戸時代初期に描かれた吉野川（正保図）を提示し，現在の吉野川と比較することでどんなメリット・デメリットがあるかを発表させ，藍作が吉野川流域に適した作物であったことを理解させる。
	3　徳島で藍作を行った田中家等の藍商農家の工夫や心情について話し合う。	3　田中家住宅の構造や特徴から，あえて洪水に遭いやすい土地に屋敷を構えた工夫や心情について想像できるように促す。
	新町川の藍倉の写真から阿波藍により繁栄した徳島市内の様子を知る。	新町川の藍倉の写真から阿波藍で栄えた徳島の様子を想像できるようにする。
	4　藍産業衰退後の徳島の第１次産業と受け継がれている阿波藍の伝統について話し合う。	4　藍関連施設の活用や製造方法の継承を通じて，阿波藍の伝統を受け継ぐ人々の思いや努力を感じ取らせる。
結論	5　本時のまとめをする。	5　ワークシートを活用し，自己評価を行わせる。